加計学園診療所における開設後5年間の歯科受診患者の臨床統計的観察

高橋　利近*・太田　正和**・塚田　陽子***

*　加計学園診療所　順正短期大学保健科歯科衛生専攻

**　岡山理科大学理学部基礎理学科

***岡山理科大学健康管理センター

(1996年10月7日　受理)

1．緒　　言

加計学園診療所は平成元年9月に内科・心療内科とともに，学生，教職員の健康管理を目的として，岡山理科大学内に開設された。

歯科診療は平成2年1月より一般保険診療を開始，学生（6568名），教職員（763名）に加えて一般の人も対象に歯科治療を行っている。歯科診療のスタッフは歯科医師1名，歯科衛生士1名で，週3日（月，火，木）の午前10時より午後3時まで受付，診療を行っている。

今回，開設後5年間の歯科受診患者の臨床統計的観察を行ったのでその概要を報告する。

2．対象と方法

平成2年1月1月より平成6年12月31日までに加計学園診療所歯科を訪れた，学生245名，教職員176名，その他一般患者29名の総患者数450名である。

3．調査結果および考察

(1)　新患・再初診患者

開設後5年間で来院した総患者数（新患患者総数）は450人で，男性351人，女性99人であった。年平均新患患者数は90人で，男女比では男性が78%，女性が22%と男性の占める割合が多くみられた。このうち学生は245人で全新患患者の54.4%，教職員は176人で39.1%と学生の占める割合が多くみられたが，山の上という比較的交通の便の良くない学園内

表1　年別 新患患者数

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	年平均
学　生	54 (6)	49 (10)	53 (12)	50 (10)	39 (5)	245 (43)	49.0 (8.6)
教職員	53 (15)	47 (11)	24 (4)	32 (7)	20 (5)	176 (42)	35.2 (8.4)
一　般	6 (2)	1 (0)	8 (6)	6 (1)	8 (5)	29 (14)	5.8 (2.8)
計	113 (23)	97 (21)	85 (22)	88 (18)	67 (15)	450 (99)	90.0 (19.8)

(　)内 女性

の診療所という立地条件からか，一般患者の新患患者数は全体で29人，全体の6.4%ときわめて少なかった。学生の男女比を見てみると男性202人，女性43人と男子学生が約80%と多くを占めていた。職員の男女比でも176人中，134人（76.1%）が男性であった。5年間の年間推移を見てみると，学生と一般の新患患者数に著名な変化は見られなかったが，教職員の新患患者数は年々減少傾向が見られた（表1）。

また再度来院した再初診患者（一度治療が終了した後などで，1ヵ月以上たって再び来院した患者）では，教職員は284人と全体の69.6%で，学生の107人（26.2%）を大きく上回り，一度治療が終了後も再度来院する教職員の多いことが分かる。年間推移では教職員の新患患者として来院する数は前述したように年々減少がみられたが，逆に再初診患者として再び受診する教職員は年々増加の傾向が見られた（表2）。

なお，再初診患者として来院した回数を調べてみると，過去5年間で最高は学生，教職員ともに8回であった。またその平均を見てみると，学生では一人平均1.6回，教職員では2.7回と教職員の再初診の回数が学生に比べて1.7倍多かった。また一度治療終了後，再初診患者として再来院するまでの期間を調べてみると平均して学生で7.2ヵ月，教職員もほぼ同じで7.6ヵ月と，治療後約半年でふたたび再初診として来院していた。

新患と再初診患者を合わせた新患・再初診患者数を見てみると総数は858人でそのうち女性は172人で20.0%を占めていた。その内訳は学生が352人で全体の41.0%，教職員は460人で全体の53.6%とそれぞれ約半数を占めていた。しかしながら一般の患者は46人と全体のわずか5.4%で利用者のほとんどが学生教職員であった。それぞれの年間の利用者数も毎年増加が見られ，学園内の診療所という特性が見られた（表3）。

表2　年別 再初診患者数

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	年平均
学　生	6（0）	18（4）	23（1）	27（4）	33（2）	107（11）	21.4（2.2）
教職員	8（2）	44（13）	68（14）	76（13）	88（12）	284（54）	56.8（10.8）
一　般	1（0）	1（0）	4（3）	3（2）	8（3）	17（8）	3.4（1.6）
計	15（2）	63（17）	95（18）	106（19）	129（17）	408（73）	81.6（14.6）

（　）内 女性

表3　年別 新患・再初診患者数

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	年平均
学　生	60（6）	67（14）	76（13）	77（14）	72（7）	352（54）	70.4（10.8）
教職員	61（17）	91（24）	92（18）	108（20）	108（17）	460（96）	92.0（19.2）
一　般	7（2）	2（0）	12（9）	9（3）	16（8）	46（22）	9.2（4.4）
計	128（25）	160（38）	180（40）	194（37）	196（32）	858（172）	171.6（34.4）

（　）内 女性

(2)　月別患者数

5年間の月別患者数では月平均34.8人の患者が来院していた。学生では月平均13.4人，教職員は19.9人であった。また新患患者は月平均7.5人で，学生は月平均4.1人，教職員は3.0人が来院していた。

各月に来院した患者総数は，6月がもっとも多く209人，ついで7月の205人で10月，12月，11月と続いていた。一方少ない月は8月の119人がもっとも少なく，ついで9月の153人，4月の157人であった。教職員では6月の115人がもっとも多く，8月の86人がもっとも少なかったが各月の変動は少なかった。しかし，学生の月別患者数を見てみると，7月の88人，6月の86人，10月の81人が多く，逆に少ない月は8月の28人，4月の49人，9月の52人，3月の56人と夏期休暇など学年のスケジュールに大きく左右されていた。また新患患者の月別分類では5月が59人，1月が49人と多く，ついで6月，10月，11月，12月と続くが，8月は11人と極端に減少していた。学生の新患患者は5月が39人，6月の28人，10月の27人が多く，8月が3人，3月の7人，2月の9人が減少していた（表4）。

5年間の月別の延べ患者数を見てみると。延べ患者総数は5994人で，月平均99.9人の受診が見られた。総診療日数は631日，月平均10.5日で，一日平均9.4人の患者数であった。

延べ患者数の多い月は6月（622人），7月（620人）が多く，8月（232人）が最も少なく6，7月の1/3であった。しかし8月は診療日数も少なく一日平均患者数は6.5人であった（表5）。

(3)　学年別（学生），年齢別（教職員）受診状況

新患として来院した学生を学年別に見てみると，最も多く受診した学年は四年生の80人で卒業をひかえて歯科への関心が高まったものと思われた。また少ないのは三年生の36人でそのほかの学年は43人と同数であった。男性では四年生，大学院生が多く，女性では四

表4　月別 総患者・新患患者数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	月平均
学　生	78 (27)	69 (9)	56 (7)	49 (25)	67 (39)	86 (28)	88 (18)	28 (3)	52 (20)	81 (27)	71 (20)	79 (21)	804 (244)	13.4 (4.1)
教職員	87 (20)	98 (18)	98 (12)	99 (11)	104 (16)	115 (15)	109 (17)	86 (7)	92 (12)	104 (15)	103 (18)	98 (16)	1193 (177)	19.9 (3.0)
一　般	6 (2)	4 (1)	13 (5)	9 (1)	7 (4)	8 (3)	8 (1)	5 (1)	9 (4)	8 (3)	8 (2)	7 (2)	92 (29)	1.5 (0.5)
計	171 (49)	171 (28)	167 (24)	157 (37)	178 (59)	209 (46)	205 (36)	119 (11)	153 (36)	193 (45)	182 (40)	184 (39)	2089 (450)	34.8 (7.5)

(　)内 新患患者数

年生，二年生が多く見られ，今後は一年生への歯科疾患の啓蒙や検診が必要ではないかと思われた（表６）。

教職員の新患患者を10歳間隔で分けた年齢別分類では30歳代が49人と最も多く，ついで40歳代が多かったが20歳代から60歳代まで幅広く患者が来院していた。また男性では30歳代，40歳代が多かったが，女性では20歳代ついで30歳代と女性は比較的若い人が多く受診していた（表７）。

表５　月別 延べ患者・診療日数・一日平均患者数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	月平均
延べ患者数	490 (98.0)	499 (99.8)	496 (99.2)	452 (90.4)	529 (105.8)	622 (124.4)	620 (124.0)	232 (46.4)	460 (92.0)	548 (109.6)	533 (106.6)	513 (102.6)	5994	99.9
診療日数	47 (9.4)	53 (10.6)	58 (11.6)	56 (11.2)	54 (10.8)	58 (11.6)	55 (11.0)	35 (7.0)	54 (10.8)	56 (11.2)	52 (10.4)	53 (10.6)	631	10.5
一日平均患者	10.0	9.5	8.8	8.1	9.8	10.2	11.3	6.5	8.6	9.8	10.1	10.0		9.4

（　）内 月平均

表６　学年別 学生新患患者数

	平成２年	平成３年	平成４年	平成５年	平成６年	計	年平均
１　年	12 (0)	2 (0)	12 (2)	7 (2)	10 (2)	43 (6)	8.6
２　年	9 (1)	13 (3)	7 (1)	8 (4)	6 (1)	43 (10)	8.6
３　年	11 (2)	5 (1)	6 (0)	8 (0)	6 (1)	36 (4)	7.2
４　年	10 (3)	17 (5)	21 (7)	22 (4)	10 (1)	80 (20)	16.2
大学院	12 (0)	12 (1)	7 (2)	5 (0)	7 (0)	43 (3)	8.6
計	54 (6)	49 (10)	53 (12)	50 (10)	39 (5)	245 (43)	49.0

（　）内 女性

表７　年齢別 教職員新患患者数

	平成２年	平成３年	平成４年	平成５年	平成６年	計	年平均
10歳代	1 (1)	0	0	0	0	1 (1)	0.2 (0.2)
20歳代	9 (4)	8 (4)	2 (1)	4 (2)	4 (2)	27 (13)	5.4 (2.6)
30歳代	18 (5)	14 (3)	8 (0)	6 (2)	3 (1)	49 (11)	9.8 (2.2)
40歳代	13 (3)	9 (4)	5 (2)	8 (0)	3 (0)	38 (9)	7.6 (1.8)
50歳代	6 (1)	7 (0)	5 (0)	6 (2)	7 (1)	31 (4)	6.2 (0.8)
60歳代	6 (1)	8 (0)	4 (1)	8 (1)	3 (1)	29 (4)	5.8 (0.8)
70歳代	0	1 (0)	0	0	0	1 (0)	0.2 (0　)
計	53 (15)	47 (11)	24 (4)	32 (7)	20 (5)	176 (42)	35.2 (8.4)

（　）内 女性

(4)　処置歯分類

義歯や歯周疾患は一顎あるいは一口腔単位で集計を行ったので，これらの処置を除いた総処置歯数は1585本であった。また学生の総処置歯数は643本で全体の40.5%であった。

処置歯の部位別では，下顎前歯部の処置歯が少なく，上下左右臼歯部の処置が多くみられた。最も多く処置された歯は右上顎第1大臼歯で97本であった。また上顎第1大臼歯は左右あわせて187例，下顎第1大臼歯も173本と左右差は見られなかったが，上下あわせて360本と多く見られ，全体の22.7%を占め第1大臼歯のケアーの必要性が示唆された。また第2大臼歯も289本と全体の18.2%と多く見られた。また智歯では上顎81本，下顎123本と下顎に多く見られこれも左右差はとくになかった。

学生では第1大臼歯が155本で24.1%を占め，ついで第2大臼歯が120本，智歯の処置が117本と多く見られた。智歯では下顎が70本と上顎の47本に比べ多く見られた。しかし下顎前歯部や上顎犬歯の処置歯は少なかった（図1）。

一回の初診期間中で処置した歯数を検討してみると，1本というのが最も多く446例で全体の52.9%を占めていた。ついで1初診あたり2本が190例（22.5%），3本が99例（11.7%）と3本以内のものが全体の87.1%で治療を終えていた。学生では1初診あたり処置数1本が213例（56.5%），2本が23.1%と全体の79.6%のものが2本以内の処置歯数で終了していた（表8）。

41	60	97	51	50	43	54	58	69	61	34	39	50	90	82	40
(26)	(30)	(38)	(22)	(14)	(13)	(22)	(23)	(24)	(26)	(2)	(10)	(22)	(34)	(29)	(21)
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
60	74	87	46	27	16	8	8	9	10	25	32	42	86	73	63
(33)	(29)	(45)	(16)	(9)	(3)	(1)	(3)	(4)	(2)	(6)	(12)	(17)	(38)	(32)	(37)

図1　処置部位歯数　まるの数字は歯式（　）内は学生の歯数

表8　処置歯数（一初診内 義歯，歯周治療は除く）

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	%
1　本	68 (42)	90 (43)	90 (45)	94 (43)	104 (40)	446 (213)	52.9 (56.5)
2　本	26 (7)	34 (20)	46 (20)	42 (19)	42 (21)	190 (87)	22.5 (23.1)
3　本	11 (6)	22 (6)	25 (13)	19 (6)	22 (5)	99 (36)	11.7 (9.6)
4　本	6 (4)	10 (2)	8 (4)	11 (4)	14 (5)	49 (19)	5.8 (5.0)
5　本		4 (2)	9 (2)	8 (2)	5 (3)	26 (9)	3.1 (2.4)
6　本		7 (1)	1 (0)	4 (1)		12 (2)	1.4 (0.5)
7　本	1 (1)		2 (1)	3 (2)	2 (1)	8 (5)	0.9 (1.3)
8　本	1 (1)			1 (1)		2 (2)	0.2 (0.5)
9　本				1 (0)	1 (1)	3 (1)	0.4 (0.3)
10　本	1 (0)				1 (1)	2 (1)	0.2 (0.3)
11～15本	1 (0)	1 (0)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	6 (2)	0.7 (0.5)

（　）内 学生

(5)　病名別分類

疾患を一歯単位，一顎単位，一口腔単位のものに分けて病名別に集計した。

一歯単位では，全体ではう歯が748例でこれは総処置歯数（1585本）の47.1%にあたり最も多かった。学生では361例と学生の総処置歯数（643本）の56.1%と中野ら[1]の報告と同様に硬組織疾患の占める割合が多く見られた。

また，う蝕から進展した歯髄炎は131例，歯根膜炎も278例と多く見られ，そしてう歯を加えたこれら3疾患で，総処置歯数の72.9%，学生では80.5%を占め，いかにう蝕に関係する疾患が多いかがうかがいしれる。そのほか歯槽膿漏症（歯周炎）は392例で新患・初診患者総数（858例）の45.7%を占めていた。学生でも176例と新患・初診患者数（352例）の50%と受診者の半数が歯周疾患を有していた（表9）。

(6)　治療別分類

治療内容では，抜髄，感染根管をあわせた歯内療法は370例で総処置数の23.3%，学生も歯内療法歯151例で総処置数の23.5%であった。また全部鋳造冠，前装冠を含めた歯冠修復処置は867例で総処置数の54.7%，学生では328例で総処置歯数の51.0%と半数以上の多く

表9　病名別分類

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	年平均
う歯	107 (46)	128 (52)	160 (89)	181 (92)	172 (82)	748 (361)	149.6 (72.2)
歯髄炎	26 (19)	25 (12)	27 (10)	17 (11)	36 (14)	131 (66)	26.2 (13.2)
歯根膜炎	33 (9)	71 (24)	65 (25)	63 (19)	46 (14)	278 (91)	55.6 (18.2)
歯槽膿瘍	4 (0)	15 (3)	25 (8)	27 (10)	20 (5)	91 (26)	18.2 (5.2)
智歯周囲炎	10 (6)	18 (12)	11 (4)	19 (9)	18 (15)	76 (46)	15.2 (9.2)
埋伏歯	2 (1)	9 (8)	12 (10)	15 (12)	19 (12)	57 (43)	11.4 (8.6)
歯根嚢胞	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (1)	3 (1)	7 (2)	1.4 (0.4)
歯牙破折・脱臼	1 (0)	0	4 (2)	1 (0)	1 (0)	7 (2)	1.4 (0.4)
鋳造物脱離	8 (3)	14 (2)	32 (4)	25 (8)	20 (7)	99 (24)	19.8 (4.8)
その他	1 (0)	4 (1)	5 (0)	3 (0)	2 (0)	15 (1)	3.0 (0.2)
欠損歯*	11 (2)	14 (0)	17 (1)	20 (1)	28 (1)	90 (5)	18.0 (1.0)
義歯不適合*	3 (0)	1 (0)	0	4 (0)	1 (0)	9 (0)	1.8 (0)
褥瘡性潰瘍*	0	1 (0)	1 (0)	2 (0)	0	4 (0)	0.8 (0)
義歯破損*	0	3 (0)	4 (0)	3 (0)	2 (0)	12 (0)	2.4 (0)
義歯増歯*	0	0	2 (0)	6 (0)	1 (0)	9 (0)	1.8 (0)
その他*	0	2 (0)	1 (0)	0	0	3 (0)	0.6 (0)
歯槽膿漏症**	34 (11)	66 (29)	89 (46)	102 (46)	101 (44)	392 (176)	78.4 (35.2)
知覚過敏**	9 (4)	11 (3)	10 (2)	11 (3)	17 (3)	58 (15)	11.6 (3.0)
口内炎**	7 (1)	7 (1)	6 (2)	0	5 (1)	25 (5)	5.0 (1.0)
舌炎**	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	0.2 (0.2)
裂傷**	0	1 (0)	2 (0)	1 (0)	0	4 (0)	0.8 (0)
顎関節症**	0	1 (1)	1 (0)	1 (1)	2 (0)	5 (2)	1.0 (0.4)
下顎骨脱臼**	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	0.2 (0.2)
その他**	1 (0)	0	0	0	0	1 (0)	0.2 (0)

（　）内 学生　*一顎単位　**一口腔単位

を占めていた。

外科的処置を行ったものは，264本で総処置歯数の16.7%，そのうち抜歯が225本，14.2%であった。埋伏抜歯では58本中，学生が44本，教職員が14本と学生の埋伏抜歯の占める割合が多く見られた。一方欠損補綴として83例が見られたが，学生ではブリッジにわずか3例見られただけで義歯の症例はなかった。

歯石の除去は332例でこれは新患・初診患者858例中の39%で，学生では352例中の46%の163例に除石が行われていた（表10）。

(7)　主訴別分類

新患来院時の問診表を参考に主訴をまとめてみた。充塡物の脱離を含めた，う歯の治療を希望するものが227例と全体の49.8%と約半数を占めて，北村ら[2]の報告と同様に歯の硬組織に関する主訴が多く見られた。歯痛，歯肉，の主脹や疼痛など痛み・腫脹を主訴とするものは173例（42%）であったが，中野ら[1]によると来院の動機は痛みを主訴とするものが最も多いと述べている。これは歯学部に来院する患者の主訴と本院のように身近にある診療所との違いかもしれない。しかし，これらで主訴の91.8%とほとんどを占めていた。また歯石除去や歯肉の出血，歯の動揺など歯槽膿漏症に関する主訴で来院する患者は25例，学生ではわずか9例と歯周疾患への関心が低かった（表11）。

表10　治療別分類

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	年平均
麻酔抜髄	22 (16)	20 (10)	20 (7)	12 (8)	30 (11)	104 (52)	20.8 (10.4)
感染根管処置	27 (8)	76 (27)	53 (25)	64 (24)	46 (15)	266 (99)	53.2 (19.8)
普通抜歯	15 (2)	33 (8)	34 (11)	41 (14)	40 (17)	163 (52)	32.6 (10.4)
埋伏歯抜歯	2 (1)	10 (9)	13 (11)	14 (11)	19 (12)	58 (44)	11.6 (8.8)
難抜歯	2 (0)	0	1 (1)	1 (0)	0	4 (1)	0.8 (0.2)
切開	5 (2)	5 (1)	5 (1)	8 (2)	7 (1)	30 (7)	6.0 (1.4)
歯肉息肉除去	0	1 (1)	0	1 (0)	0	2 (1)	0.4 (0.2)
歯肉弁切除	1 (1)	0	2 (2)	4 (3)	0	7 (6)	1.4 (1.4)
レジン充塡	53 (21)	55 (20)	90 (38)	97 (54)	99 (46)	394 (179)	78.8 (35.8)
インレー	21 (11)	24 (13)	25 (18)	17 (15)	19 (9)	106 (66)	21.2 (13.2)
4/5冠	14 (7)	13 (4)	18 (12)	24 (11)	27 (16)	96 (50)	19.2 (10.0)
全部鋳造冠	34 (13)	45 (18)	46 (20)	47 (20)	42 (11)	214 (126)	42.8 (25.2)
前装冠	3 (0)	10 (1)	14 (1)	15 (3)	15 (2)	57 (7)	11.4 (1.4)
ブリッジ	5 (1)	2 (0)	5 (1)	3 (0)	5 (1)	20 (3)	4.0 (0.6)
再装着	8 (3)	15 (3)	31 (4)	25 (8)	20 (9)	99 (27)	19.8 (5.4)
総義歯*	1 (0)	0	0	1 (0)	0	2 (0)	0.4 (0)
局部義歯*	5 (0)	9 (0)	12 (0)	15 (0)	20 (0)	61 (0)	12.2 (0)
義歯修理*	1 (0)	3 (0)	8 (0)	5 (0)	0	17 (0)	3.4 (0)
義歯調整*	2 (0)	1 (0)	1 (0)	3 (0)	4 (0)	11 (0)	2.2 (0)
歯石除去**	33 (11)	58 (25)	81 (45)	84 (40)	76 (42)	332 (163)	66.4 (32.6)
知覚過敏処置**	10 (5)	14 (3)	10 (3)	11 (3)	16 (3)	61 (17)	12.2 (3.4)

(　)内 学生　*一顎単位　**一口腔単位

表11　新患患者の主訴別分類

	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	計	%
歯痛	37 (24)	19 (33)	22 (17)	28 (15)	27 (15)	147 (90)	36.7 (32.7)
歯肉腫脹疼痛	8 (4)	6 (3)	4 (2)	5 (3)	3 (1)	26 (13)	5.3 (5.8)
歯の治療	55 (22)	48 (24)	49 (29)	43 (27)	23 (15)	218 (117)	48.6 (47.8)
充塡物脱離	4 (3)	1 (1)	1 (1)	2 (1)	1 (1)	9 (7)	2.9 (2.0)
歯石除去	1 (0)	4 (1)	1 (1)	4 (2)	3 (2)	13 (6)	2.9 (2.5)
歯槽膿漏	3 (1)	1 (0)	2 (1)	3 (0)	3 (1)	12 (3)	2.7 (1.2)
義歯	3 (0)	2 (0)	4 (0)	1 (0)	1 (0)	11 (0)	2.4 (0)
その他	1 (0)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	6 (4)	13 (10)	2.9 (4.1)

( )内学生

4．結　　び

人生80年代をむかえるなか，ますます歯や口腔の健康が重要な要素になってきている。厚生省では成人歯科保健対策検討会の中間報告[3]を受けて平成元年から8020(ハチマルニイマル)運動を展開している。しかし，平成5年歯科疾患実態調査[4]では70歳で平均してわずか11.4本しか歯が残っていない実状である。このような永久歯の喪失原因にはう蝕が46.3%，歯周炎が45.6%とこの2大疾患でそのほとんどが占められている[5]。このような歯の喪失原因の大きなウエートをしめる歯周疾患は他の炎症反応と異なり，初期は自覚症状が少なく，慢性期が長いことなどから，患者の歯周疾患に対する認識がう蝕と比較するときわめて低いと考えられる。さらに，患者自身の日常管理にその病状が大きく左右されるという特徴があり，これらのことを十分に考慮に入れて治療や予防を行っていかなければならない。

とくに年齢の増加に従って歯周疾患が重症となって歯の喪失が急増する時期である成人期，とりわけ20歳代，30歳代の初期の歯周炎の段階で重症化の予防管理を集中させることが歯周疾患の予防には何より肝要なことかと思われる。以上のことから大学生における歯周疾患の予防管理が今後大いに検討されなければならない問題である。今回，学園内における歯科診療の概要を報告したが，その結果でも歯石除去の処置を半数が必要としたにもかかわらず，歯周疾患の予防への認識がきわめて低いことが示唆され，本学でも特に学生の歯周疾患の管理として，口腔の健康教育・指導から定期的な口腔健康診断，分析，そしてそれらにもとずくブラッシング指導や歯石除去などの予防処置，そして定期的な経過観察など総合的な管理が心要と痛感させられた。これらのことを踏まえて，全国的にも珍しい，学園の中にある歯科診療施設としてこれからより一層，診療，研究に充実した内容が求められるものと考える。

本論文の要旨の一部（学生に関して）は第33回全国大学保健管理研究集会（1995年，10月5日，秋田）において発表した。

参考文献

1）中野憲一，岡田典久，増田　屯，大澤孝一，中田公人，田中庄二，藤倉もり子，後藤俊介，中里義博，

小峰一雄，福田睦子，町野　守，山口裕之：明海大学歯学部予診科における過去16年間の新患の臨床統計的観察，明海歯学誌，**18**（3），382-389（1989）.
2）北村中也，角田治美，高梨英樹，信楽みどり，寺田恵美子：本学歯学部附属病院における初診患者の主訴および疼痛について，鶴見歯学，**4**（1），7-11（1978）.
3）成人歯科保健対策検討会編：成人歯科保健対策検討会中間報告，東京，1-9（1989）.
4）厚生省健康政策局歯科衛生課：平成5年歯科疾患実態調査の概要資料編，（1994）.
5）神奈川県歯科医師会：抜歯要因調査研究事業報告書，横浜，7-14（1992）.

A Clinico-statistical Observation of the Dental Patients for the Past 5 years at the Kake Medical Office

Toshichika TAKAHASHI*, Kazumasa OHTA** and Yoko TSUKADA***

* *Kake Medical Office*

** *Deparment of Applied Science, Faculty of Science*

*** *Health Center*

Okayama University of science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700 japan

(Received October 7, 1996)

The dental clinic at the Kake Medical Office was established in January in 1990 for students, school personnel and general patients.

We report 5-year clinical statistics after its establishment.

1) A number of a new patient was 450, with 351 male and 99 female. The number of students was 245, school personnel 76, and general patients 29. There was little annual change in the number of the students while the new patients of school personnel decreased in number. The number of school personnel revisiting the clinic increased annually.

2) The number of monthly patients was the biggest in June and the smallest in August. The average number per month for the students was 13.4 and 19.9 for the school personnel.
The total number of the patients was 5994.
The total number of days for consultation was 631, with the monthly average of 10.5.
The daily average of the patients was 9.4 in number.

3) The senior students coming to the clinic exceeded the other graders in number.
The school personnel in their thirties and the female in their twenties outnumbered the others.

4) The number of the treated teeth was small in the lower front tooth regions and big in the molar, especially the first molar tooth regions.

5) Dental caries, pulpitis, and periodontitis consisted of 72.9%, and periodontal diseases 392 cases (45.7%).

6) The endodontic treatment was 370 (23.3%), the restorative treatment 867 (54.7%), and the tooth extraction 225.

7) The chief complaints of first-coming patients showed 227 painless dental caries (49.8%), 173 pain and swellings (42%).